

平成 21 年 6 月 13 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820024

研究課題名（和文） 米軍基地内の音楽実践に関する日韓比較研究
1945～1970年前後を中心に研究課題名（英文） A comparative study of Japan and South Korea on the musical practice
in U.S. military camp: 1945～1970

研究代表者

東谷 護（TOYA MAMORU）

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10453656

研究成果の概要：

本研究の遂行によって、日本での米軍クラブの音楽実践、すなわち進駐軍クラブと、韓国での米軍クラブの音楽実践、すなわち米8軍舞台とは、米軍クラブでの音楽実践そのものだけでなく、米軍クラブへの介入の方法、すなわち仲介業の存在と仲介方法、自国の音楽文化への影響などの点において、非常に似ていることが実証的に明らかになった。なお、インタビューをした方々は、駐韓米軍クラブで音楽実践の経験のある8名であり、内訳は、バンドマン6名、歌手1名、バーテンダー・クラブマネージャー1名である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,190,000	0	1,190,000
2008年度	1,160,000	348,000	1,508,000
総計	2,350,000	348,000	2,698,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：アメリカナイゼーション、ポピュラー音楽、在日米軍基地、在韓米軍基地、ライフヒストリー、進駐軍クラブ、米8軍舞台、歴史社会学

1. 研究開始当初の背景

(1) 音楽のグローバル化は現代に始まったわけではない。いにしえから文化交流のなかに音楽の存在は認められている。とりわけ西洋古典芸術音楽の世界的な広まりは、芸術という思想をも広くいきわたらせるものであった。20世紀に入ってから大量複製技術の発展によって、欧米のポピュラー音楽が世界的に広まったが、ロックミュージックはその最たる例である。仮に前者のクラシックの普及が五線譜の威力とするならば、ロックミュージックはレコード、ラジオ、テレビ等のメディアの威力によるものだといえるだろう。だが、いきなりメディア時代が到来したのでは

ない。日本でのテレビの本放送が始まるのは1953年であることを鑑みれば容易にわかることだ。かつての音楽を取り囲む環境を検討する際に軍隊の存在は無視できない。古くは軍楽隊がブラスバンドを世界各地に広め、20世紀以降にはジャズを世界に広めた。とりわけ米軍が、日本、韓国、フィリピン等の東アジア地域に、欧州ではドイツ、イタリア等に基地を設置したことは、地政学やポストコロニアル研究だけでなく、音楽文化研究にとっても重要な研究対象といえよう。

(2) ポピュラー音楽は、その広まりの速さと量は他を圧倒していることもあって、外国音楽

の受容を積極的に扱っているのはポピュラー音楽研究といってもよいだろう。だが、ポピュラー音楽研究の最大の弱点は、歴史的な視点に欠けていることが多いことである。たとえば、他分野からもポピュラー音楽研究の代表的エッセイとして、小川博司『音楽する社会』(1988)があげられてきたが、小川の「現代ほど日常的に音楽が溢れていることはない」という指摘や、日本の音楽の大きな転換点は1960年代の高度経済成長期とすることなどは、歴史的視点に欠けた好例といえよう。ポピュラー音楽研究者は、ロックミュージックに着目するばかりに、他ジャンルへの目配りが行き届かず、歴史的視点を欠いたものとなってしまったと推測できよう。

(3)このようなポピュラー音楽研究の弱点は、西洋芸術音楽を仮想的にしながらかも、ジャンル論や作家作品論に埋没することから生じたものと思つた。まずは現代日本に鳴り響くポピュラー音楽とそれを支える音楽産業を単一のジャンルとして考察するのではなく、歴史的な繋がりがどうかを検討した結果、米軍基地内に存在するクラブという場に注目するに至った。占領期日本では、進駐軍クラブで演奏したバンドマンが多数いたことや、クラブがジャズの発展に大きな影響を与えたこと等はエピソードとして語り継がれている。だが、多くの刺激的な成果を世に問うた占領史研究においてさえ、進駐軍クラブに関する研究はなかった。そこで、報告者は当時の実体験者への直接のインタビューを含む一次資料を重視した基礎研究を行ってきた。占領期当時のクラブの状況を体験したバンドマン、仲介業者やクラブの従業員だった方たちへのインタビューを重ねた。これらを基に考察した研究成果は、博士学位論文として提出した。改稿したものは、東谷護『進駐軍クラブから歌謡曲へ』(2005)として刊行した。残した課題を基に、音楽文化にとって米軍基地をどのようにとらえていけばよいのかを、東谷護「戦後日本ポピュラー音楽史の構築へ向けて - 真正性とメディアを手がかりに」(2005)として論じた。

(4)報告者は、占領期当時のクラブの状況を体験したバンドマンにインタビューしているなかで、朝鮮戦争後に米軍関係者からの依頼で韓国の米軍クラブに出演するバンドに演奏技術を教えにいった方に出会った。彼は米軍軍用機で韓国に赴いたという。この事実をどう解釈すればよいのだろうかという疑問は私の頭の中に残ったままであった。学位取

得後の翌年、ソウルの聖公会大学東アジア研究所主催の国際会議に招聘された際に、ソウル市内の駐韓米軍基地周辺を見学した。韓国滞在中にお世話になったシン・ヒョンジュン博士、在日韓国人研究者の金淑子氏から米軍基地内のクラブが韓国の音楽文化に与えた影響を教えていただいた。残念ながら韓国でもまだ学術的研究は遅れており、

『1960』(シン・ヒョンジュン他『韓国ポップの考古学1960』、2005)が目立った成果に過ぎない。エッセイでさえ、妾信子『日韓音楽ノート』(1988)のなかに参考になる記述がみられるに過ぎない。

米軍機に乗って駐韓米軍基地内のクラブに演奏を教えに行ったバンドマンの行動への疑問は、米軍基地というネットワークは本格的なテレビ時代の到来後にも音楽の普及に大きな影響を与えたという仮説となったのである。本研究は、私がこれまで研究してきた成果を韓国に視野を広げたものだが、それだけにとどまるものではない。本研究は、米軍基地という特異な空間が、アメリカ発の音楽が他国の音楽文化に与えた影響という事実とアメリカナイゼーションやグローバルという概念との差異を検討することやアメリカ文化を自国の文化としてどのように受容し消化したのか、あるいは抗ったのかというローカルの問題をまで射程にいれている。もちろん、その対象の中心となるのは音楽文化である。

2. 研究の目的

(1)本研究は、第二次世界大戦後に日本と韓国に多数設置された米軍基地内の米軍人向けクラブにおける音楽関係者たちの音楽実践に着目し、当事者への直接インタビューを含む一次資料を中心に考察を行う実証的なものであり、当時の状況を明らかにすると同時に、両国の音楽実践の文化的意義と、その比較を通して米軍基地が音楽文化に与えた影響を考察するものである。

(2)まずは本研究において、第二次世界大戦の終焉である1945年からベトナム戦争の後半にさしかかる1970年代前半までを考察対象の期間と定めることによって、考察期間における日本と韓国にあるそれぞれの米軍基地内のクラブでの音楽実践の持つ意義を明らかにした上で、両者の比較をしたい。21世紀に入ってから日本と韓国は、より身近な存在となったが、両国が第二次世界大戦後に歩ん

だ道はあまりにもかけ離れたものだった。日本は占領期を 1952 年に終えると、高度経済成長期へ向かい、戦後日本のめざましいほどの発展という時代を迎える。占領といういわば暴力としてのアメリカは、1980 年代の消費社会を迎えると、日本人はアメリカをも消費する存在にまでなった。翻って韓国では、20 世紀後半まで軍事政権の下、駐韓米軍とともに時代を歩んだ。あまりにも異なる歴史を刻んできた日本と韓国だが、基地内のクラブで流れた音楽は、アメリカのポピュラー音楽だったのである。時代背景が違うにもかかわらず、いつも「アメリカ」という特異な空間には同じ音が鳴り響いていたであろう。本研究では、実際に流れた楽曲を当時の駐留軍ラジオのプログラムの記録やクラブで演奏したバンドマンへのインタビューによって解明する。また、当時の基地内外での演奏だけにとどまらず、演奏の機会を与えた手配師や仲介業に関わった者たちの音楽実践の解明も視野に入れる。

(3)本研究の特色は、日本の占領史研究で見落とされた音楽の領域を明らかにした報告者の研究成果を韓国との比較に発展させ、一次資料の掘り起こしと、実体験者へのインタビュー調査を基本にしている点において、基礎研究と位置づけられよう。また、あまりに対照的な日本と韓国だが、米軍基地内での音楽実践に差異はなかったと予想されるが、米軍基地の与えた音楽的衝撃を実証的に扱う点において、音楽以外の研究分野にも論が広がる点で独創的と言えよう。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、日韓それぞれの時代背景の整理と確認からはじめて、米軍基地という特異な空間の歴史的意義に関しての先行研究の整理とともに、音楽の他文化への普及過程に関しての各々の事例と理論、理論間の方法論的な関係性について整理する。こうした準備と併行して、効率的に研究を進めるために、事例調査として話をうかがう方の選定に関する予備調査を行う。この際に、ソウル在住の聖公会大学東アジア研究所のシン・ヒュンジュン博士に研究協力をさせていただく。予備調査後、日本、韓国での実体験者へのインタビュー調査を行う。調査後、文献資料とともに、分析・考察する。方法としては、文献を引用しながらもインタビューを含む一次資料の掘り起こしとそれらの徹底的な分析によって、当時の実態を解明する。その上で理論構築を目指したい。

4. 研究成果

(1)平成 19 年度は、研究を遂行するために、時代背景、理論、理論間の方法論的な関係性についての整理、確認とインタビュー調査の設計を目的に研究会を 5 回行った。この研究会では、とりわけ韓国の大衆音楽史に関して、電子メールを通して、聖公会大学東アジア研究所のシン・ヒュンジュン博士から助言をいただいた。

(2)こうした下準備を経て、平成 19 年 12 月に事例調査として話をうかがう方の人選に関する予備調査とソウル市内にある国立図書館での資料収集を行った。シン博士の協力のもと、インタビュー候補者として「米 8 軍舞台」での音楽実践の経験者 12 名を選んだ。資料収集では、主に 1960 年代に発行された新聞雑誌から在韓米軍基地内のクラブでの音楽実践に関わる記事を複写した。とりわけ、当時の韓国の大衆音楽事情を考察するのに重要な資料である 1966 年創刊の月刊誌『가』(歌謡生活)については図書館に蔵書としてあったすべての号(1966 年創刊号～1970 年 12 月号までの 52 冊)について記事一覧を作成した。

(3)帰国後、先述した 12 名のうちから 2 名に連絡をとり、翌年の平成 20 年 3 月にソウル市内でインタビューを行った。また、3 月、ソウル滞在中に言論情報学科の 3 名の教授と意見交換を行った。この意見交換のなかで、本研究が韓国においても先行研究がほとんどないものであり、研究の革新性が教授陣から指摘されたことは、本研究を進める上で有意義であった。

(4)国内については、報告者の今まで行ってきた研究成果に本研究の目的とする韓国との比較を視野に入れた論文を聖公会大学東アジア研究所の叢書『冷戦アジアの文化風景 1:1940-1950 年代』(叢書はすべて韓国語)に寄稿し、平成 20 年 2 月にソウルで刊行された。この成果刊行物の刊行によって、本研究が韓国語でも読むことができるようになった。このことは、きわめて意義のあることであるといえよう。

(5)平成 20 年度は、19 年度に引き続き、5 月、11 月、3 月にソウルにて駐韓米軍基地内に設置された米軍クラブに出入りした韓国人ミュージシャン 5 人、韓国人のクラブマネージャー 1 人にインタビューを計 9 回行った。とりわけ、韓国人従業員はバーテンダーの仕事を経て、クラブマネージャーの仕事をしていただいた方である。

(6)本研究においては、韓国での調査が予想

以上に成果をあげたといえよう。特にインタビューをお願いした方々が高齢（平均 70 代後半、最高齢は 88 歳）だったため、科研費の予算は韓国出張に国内旅費の分まで使用したため、国内での現地調査は私費で行ったのでここでの詳細な報告は省略する。上述したように、順調にインタビュー調査が進んだため、当初よりも韓国でのインタビュー調査に力点を置くことにした。そのおかげで、先のような貴重な話を伺うことができた。

なお、インタビューは当初、予定していた方々の他に、研究を進めていく中で、紹介をうけて新たにインタビュー候補者となった方がいた。あるいは、連絡を試みたものの、連絡がとれなかった方や、お亡くなりになった方もいらした。

(7)最終的にインタビューをした方々は、駐韓米軍クラブで音楽実践の経験のある 8 名である。職業の内訳は、バンドマン 6 名、歌手 1 名、バーテンダー・クラブマネージャー 1 名である。なお、バンドマン 1 名については、インタビューを 3 回、バーテンダー・クラブマネージャー 1 名についてはインタビューを 2 回、バンドマン 1 名についてはインタビューとは別に電子メールでの質問を 2 回、行った。

これまでに行ったインタビューのほぼ 9 割のトランスクリプト化を 2009 年 6 月 13 日の時点で終えている。継続して、残りのトランスクリプト化を行い、何らかの形で公開を検討しているところである。

(8)先述した、各々の研究成果とは別に、本研究の大局的な視点から研究成果を以下に記したい。韓国での米軍クラブの音楽実践と日本での米軍クラブの音楽実践は、本研究によって、非常に似ていることが実証的に明らかになった。報告者は、音楽のグローバル化を捉える視座と理論構築の作業として、論文を執筆した。この論文は、「双書 音楽文化の現在」というシリーズに収められた東谷護（編著）『拡散する音楽文化をどうとらえるか』（勁草書房）に所収されているため、広く目に触れられることであろう。その意味でも本研究の成果は、国内でも波及効果があるといえよう。

(9)本研究では、当初、映像や音源の比較分析まで視野にいたった研究計画であったが、これらについては、インタビュー調査を優先したため、今後、当初の計画した側面に対して、鋭意、分析に取り組んでいきたいところである。

(10)今後の展望としては、米軍基地が世界の音楽文化に与えた影響の理論構築を目指し

たい。

戦争、帝国、植民地といった鍵語が、あまりにも芸術や娯楽と無縁なために本研究の意図するところが見えにくくなっているきらいがある。また、音楽という娯楽なゆえに、一次資料の散逸、あるいは一次資料さえままならない状況を文献のみならず、当時の実験者へのインタビューの重要性も見えにくくなっているようである。

こうした状況を打破するためには、基礎資料の整備という基礎研究の継続とともに、研究の重要性を声高に述べていくことが、重要であろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

TOYA MAMORU,

—

【 】,

1

1 :

1940-1950 、

、360~385 頁、

2008 年、査読有。

東谷護、韓国「米 8 軍舞台」形成初期にみる K P K の特異性、成城文藝、204 号、73~83 頁、2008 年、査読有。

東谷護、それはクラブから始まった、音楽文化の創造、48 号、32-35 頁、2008 年、査読無。

〔学会発表〕(計 1 件)

東谷護、いつも見ていたアメリカ、日本ポピュラー音楽学会第 20 回大会、2008 年 11 月 29 日、成城大学。

〔図書〕(計 1 件)

東谷護（編著）勁草書房、拡散する音楽文化をどうとらえるか、2008 年、256 頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

東谷 護 (TOYA MAMORU)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10453656